

2021 年「4・13 根津山小さな追悼会」のご報告

4・13根津山小さな追悼会は今年で第28回を迎えます。

昨年2021(令和3)年第27回追悼会では、新型コロナウイルス感染症対策のため事前に参加人数を把握する試みとして、ご案内と一緒に参加・不参加の返信ハガキを発送いたしました。当日の設営の簡素化、時間を短縮するための式次第の一部割愛などこれまでにない方法を模索しながらの開催でした。

式次第では、小田代表の健康状態もあり代表挨拶と、合唱、被災体験者談話を割愛し、区長挨拶、朗読、読経、お祈り、献花を捧げました。「参加はご無理をせずに」と呼びかけての開催でしたが、例年の100名以上には及ばないものの、約90名の皆さまと空襲犠牲者を追悼し、平和への祈りを捧げることができました。

一昨年コロナ禍による緊急事態宣言で初めて追悼会が中止となった翌年ただけに、ご参加くださった皆さま、開催や設営にお力添えくださった皆さまに深く感謝申し上げます。

当日、療養のためご挨拶が叶わなかった小田光野氏は、追悼会が無事開催された数日後に永眠されました。平成15年より代表を務めた同氏に感謝すると共に、新代表と共に今後も力を合わせて追悼会を継続し、次の世代に繋げて行くべく務めたいと気持ちを新たにしております。

今後とも皆さまのご参加、お力添えをいただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

4・13 根津山小さな追悼会実行委員一同



【被災体験記のご紹介】

追悼会初期の頃に寄せられたと思われる被災体験記が見つかりました。

広中愛訓さんの「赤いランドセル」です。広中さんは、すでに東京空襲を記録する会 1973 年発行『東京大空襲・戦災誌 第 2 巻』に「褐色の焼死体」を寄稿されていますが、その内容を見ましても、それとは別に「赤いランドセル」の原稿を寄せられたものと考えられます。残念ながら広中さんにはご連絡がつきませんでした。当時の状況を伝える貴重な体験ですので、今回『4・13 根津山だより』に掲載させていただきました。

もし少しでも広中さんに思い当たる情報、当時の被災状況に繋がる情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、是非当会までお知らせください。お待ちしております。

赤いランドセル

広中愛訓（寄稿当時：板橋区成増在住）

今年も満開の桜の木の下で、舞い降りてくる薄紅色の花びらを背に受けながら、私はあの日のこと、そう、城北大空襲の日のことを、昨日のことのよう思い出す。

あれは悪夢だったのだろうか。

今日も公園の中では、肩を寄せ合ったり、手を繋いだりしたカップルが、春らんまんの陽光を浴びている。平和な世の中の何と幸せなことだろう。

あの昭和 20 年 4 月 13 日の夜の池袋周辺は、まったくの生き地獄であった。

当時、私は豊島商業を卒業し、専修科に籍を置いたまま、拝島の昭和飛行機に動員されていた。

夜 8 時頃、帰宅すると、姉と晩ご飯の支度をして私を待っていた母が

「ルーズベルト大統領が死んだって」と、口早に言い、「それに今日は 13 日の金曜日だから、きっと空襲はないと思うけどねえ」と、私を見上げた。

だといいが、と思いながら夕飯をすませ、一応、みんな服のまま 10 時頃、就寝した。

11 時半、突然、大粒の雨が屋根を叩きだした。驚いて目を開けると、雨戸の隙き間が昼の様に明るい。

飛び起きて雨戸を繰った。目を射るような火の玉が夜空をゆらゆらと落ちてくるではないか。空襲が始まっているのだ。

二階に駆け上がってみると、窓の外、彼方四方に火の手が上がり、火の輪を作り始めている。四方を火の輪で囲み逃げ道をふさいで、それから中心を焼く気なのか。

母が庭に掘った防空壕に蒲団を持って入ろうとしている。私は窓を開け叫んだ。

「母さん、逃げよう」

駆けおりた私にせかされて家の中に入った母と姉が、リュックを背負い防空頭巾を被って出てきた時には、提灯に火をつけたような赤い玉が、雹が降ってきたときのような落下音をたて、そちこちの屋根に、地面に、火柱を上げていた。

住民達は、いったんは消火に取りかかったが、とても消火しきれ数ではない。皆、断念して思い思いの方向へ逃げ出した。私達親子も一路、川越街道先の中丸町方面に向かった。

表通りに出ると、かかりつけの田中医院が目の前で焼夷弾の直撃を受け、一瞬にして火焰に包まれた。私達は地面を這うようにして駆け抜け、山手線の線路に出た。

線路は焼け出された人達がいっぱいで、子供の泣き声や、家族を呼び合う声が怒号となって渦巻いていた。

赤羽線の線路づたいに、私が先に立ち、母と姉が離れないように手を繋いで後ろに続き、歩き出した。私は背中では後ろの二人の息遣を確かめながら足を早めた。

東上線の堀之内駅から三つ又に出た辺りだった。拳大の火の粉が降りかかってきた。行く手の家々が燃え盛り、火の粉を巻き上げて屏風のように立ちはだかっている。

誰も前へ進めない。立ち往生し、右往左往する私達に警防団員が声を張り上げ、避難方向を指示する。が、どこからついて来たのか、家財道具を積んだ馬車も交じっていて、逃げ場を失った私達一団はたちまち阿鼻叫喚の巷と化した。

「水をかぶれ！水を、水をかぶれ！」警防団員の声が飛んでくる。

私達親子三人は、自分の水筒の水を互いにかけて、必死で逃げ道を捜した。そっちへ駆け、こっちへ駆けして下火になったわずかな隙き間を、やっと見つけた私は

「ここだっ」

母と姉を従え、濡らした頭から突っ込んだ。

抜け出してみると、そこから先には燃えた家はなかった。その辺りがその夜の空襲の境だった。私達は火の壁を脱出できたのだった。

三つ又で逃げ惑い、右往左往した人達は皆、あのわずかな隙き間から逃げ出すことができたろうか。やっと人ひとりが通り抜けられるわずかな隙き間だった。

私は辺りを見回した。馬車の姿はなかった。無理だったに違いない。おそらく馬方だけ逃げたのだろう。

それに、三つ又に来る途中の顔見知りの人、病人を背負った人、歩くのがやっとの老夫婦の手を引いていた女性、あの人達みんな逃げられたか。火の壁に囲まれた内側から、炎を破って外側に出了るか。

私達家族は中丸で夜が明けるのを待ち、川越街道を池袋五つ又へ向かった。

電柱が火を噴いて燃えている。振りかかる火の粉を払いながら東上線の陸橋に出ると、人びとが防空頭巾を目深に下げ、火焰の静まるのを待っていた。人びとの目は一様に熱風と煙で赤くただれている。私もしきりに涙が出て目が痛んだ。

火がおさまりかけた。一面の焼け野原の中を、家の焼跡に帰り始めた人びとに混じって、私達も我が家のあった堀之内町 992 番地へと足を向けた。

家の近くまで来ると、道端に焼けただれたマネキン人形がころがっていた。横を通りすぎようとして、私は目が釘づけになった。

褐色に焦げている顔、毛のない黒焦げの頭、人間ではないか。姉も目を送ったようだが、母に気付かせまいとしたのか、足を停めるでもない。

裏通りへの角を曲がった。

二軒目の質屋の蔵が焼け落ち、下敷きになった防火用水の中に、子供の靴が片方、見えかくれしている。近づくに連れ、私達三人の視線が捉えたのは子供の焼死体だった。

「あっ」

思わず足がすくんだ。

「——ア、アタマがない」

「えっ、ジゴク、ジゴクウウ……」

母の震えた声が重なった。

逃げる途中で親にはぐれたのか、それとも逃げ遅れた親子が、火の海の中でこの防火用水を見つけて飛び込んだのか。

私は目を凝らした。親と思えるものはなかった。水槽の底に、真新しい赤いランドセルが沈んでいるのが見えた。

「一年生みたい……」

姉が鼻声で言った。

水槽の中で苦しくて出した頭を、火焰がさらっていった——。

私達は無言のまま家の焼跡にたどり着いた。祖父の代から昨夜の 11 時半まで、一家三代を風雪から守ってくれた我が家は、一面の焼け野原の一角で灰となり、熱気を残して私達を待っていた。

母は崩れるように膝をつき、軍手をした両手に熱い灰をすくった。

「お母さん、火傷しちゃう」

灰を振り払おうとした姉の手を除け、母は握った拳を顔の前に上げ、頬に当てた。落ちた涙が灰にしみていく。

私は母の肩に手をかけた。

「母さん、うちはみんな助かったんだ。ねっ」

「そうよ、三人とも無事だったのよ。お母さん」

姉も声を詰まらせて言った。

しばらく動かなかった母が立ち上がり、私と姉を抱き寄せた。

母の腕に顔を付け、すすり泣く姉の横で、私は、出征した父が帰って来る日まで、この母と姉を絶対守らなければと思った。

被災当時：18 歳・学生／豊島区堀之内 992 番地



2021 年のお便りから

加藤宣彦（被災当時 18 歳、池袋 2 丁目在住）

あの夜、私は、西へ西へと今の川越街道を逃げ、小高い農家の庭で疲れ切って仮眠しました。そして、夜明けと共に、東へ東へと、逃げてきた道を引き返し「重林寺」にたどり着きました。

そこには、どこからか炊き上がった大きな食缶を若い兵隊さんが軍用トラックから重林寺の境内に運び込んでいました。国防婦人会のおばさんたちが手ぎわよく「おむすび」にして、それを若い兵隊さんたちが手早く罹災者に配ってくれました。（もちろん一人一個）

私は重林寺から池袋二丁目第三町会が臨時に移った豊島商業に行き、罹災証明書を発行してもらいました。（これがないと切符が買えません）

その夜は豊島商業で雑魚寝、翌日は乾パンの給食。新宿まで歩き、そこから小田急線で小田原駅まで行き、そこで東海道線に乗りかえ、姉や妹の待つ愛知県の西尾市にたどり着きました。

*お便りの一部を紹介させていただきました。

被災証言集第3集証言集に掲載の「炎の記憶」には空襲直後の避難の生々しい体験、このお便りでは空襲から逃げ切った後の様子が語られています。

城北大空襲被災体験を語り継ぐ 4・13 根津山小さな追悼会 被災証言集

4・13 根津山小さな追悼会では、大きな空襲の中を今日まで懸命に生き抜いた方々の体験を記録し、次の世代に語り継ぐために、「追悼会十周年記念文集」「被災証言集第2集」「被災証言集第3集」を発行して参りました。一人でも多くの方々に読んでいただけるよう願っております。



被災証言集第2集 2014/3/25・B5 版・本文モノクロ・114 ページ・被災体験者証言地域図付き〈31名の空襲被災証言地域：雑司ヶ谷町・目白町・池袋・要町・日ノ出町・西巣鴨・巣鴨・駒込、隣接地域(板橋区弥生町)〉 目次：「四・一三空襲体験」田中久子、「被災後に役立った防空壕」峯岸静子、「火音の恐怖」きたまこと、「根津山に逃げた」田中不二、「四月一三日当日と戦中戦後の生活」坂上 明、「見つからなかった父の大工道具」小倉敦子、「戦争・空襲・終戦の青春時代」坂東和之丞、「学童疎開から戻って」河西弘子、「戦災に遭遇して」神戸美枝、「私と戦争(戦災の日のこと)」矢部喜美代、「焼け出され始末記」岡田和道他、●論文寄稿「城北大空襲とは何であったか？」青木哲夫



被災証言集第3集 2018/3/25・B5 版・本文モノクロ・132 ページ・被災体験者証言地域図付き〈38名の被災証言地域：池袋・雑司ヶ谷・目白町・高田本町・椎名町・長崎・堀之内町・西巣鴨・巣鴨、近隣区の四月一三日・五月二五日空襲、豊島区外の空襲・学童疎開・勤労動員など〉 目次：「根津山へ逃げた」峰岸郁子、「救護活動中に空襲で亡くなった父」剣持信子、「兄 井熊友弥の遺品を前にして」星 静江、「空襲の火に映える満開の桜 忘れない」越阪部文江、「燃える空と地の間で!! 一私の空襲体験」青山巖雄、「弟を背負って 巣鴨拘置所の原っぱへ」宮崎さと子、「炎の記憶」加藤宣彦、「跡形もなくなった自宅」坂本弘道、「四月一三日前後のこと」山本澄代 他、●論文寄稿「豊島区の学童疎開」青木哲夫

* 証言集は発行費用に相当するご寄付をお願いしております。どうぞお力添えをお願い申し上げます
「被災証言集第3集」1500 円、「被災証言集第2集」1000 円、「追悼会十周年記念文集」配布終了
* 送料は実行委員会が負担します * お問合せ、お申し込みは事務局へお願いします